

亀井勝一郎

日本人の文学



# 日本人の文学





日本の文学史の最大の誤りというのは、宗教やいろいろな社会思想とか、そういう面を度外視して、ただ文学だけに限定した文学史というものが書かれてきたことです。これは他の国の文学史と比べますと、非常に視野が狭いわけで、皆さんがどの時代の文学史を勉強なさる場合でも、そのときの重要な社会思想と、宗教問題というもの度を度外視しては、ほんとの文学史というものは成立しないわけです。大まかに申し上げますと、日本の歴史

をふり返ってみて、外国の文化の影響を受けて、そして日本民族が大きく変化していく重要な時期が三つあります。

第一は、私はいわば「民族の変貌期」と呼んでいるのですが、その第一の民族の変貌期は七世紀から九世紀です。飛鳥、奈良、平安朝の初期、このときはご承知のように、当時の朝鮮、それから中国、インド等の、新しいいわゆる大陸文化が日本に入ってきた時期です。こういう民族の変貌期の場合、一番重要な役割を果たすのは思想であって、仏教と儒教がそのとき入ってきて、その後

の日本人の精神の歴史を決定したといってもいいほど、大きな影響を与えたわけです。外来文化の影響を受けて、民族が変わってゆくという意味での民族変貌です。

それから第十世紀から以後、ことに平安朝末期から、鎌倉中世に入っていて、そこで仏教や儒教が日本風に評価されていくわけです。

その次に外来文化の影響を受けた重要な時期というのは、十六世紀後半です。織田、豊臣時代、このときキリシタンとポルトガルの文化が入ってきた。日本が初めてヨーロッパに接触した時期です。しかしこれは前後五十

年間ぐらいでして、それから間もなく徳川幕府が鎖国政策を敷いたために日本は一たんヨーロッパというものから切断されます。しかしこのキリシタンとポルトガルの文化に接触したということは、非常に重要な意味を持つております。

それから第三の民族変貌期が明治、大正、昭和、つまり私たちが現に生きているこの時代です。この百年という短期間に、外来の思想として日本人に決定的な影響を与えたのが明治プロテスタントイズムと昭和の共産主義です。むしろその反面に、日本風に評価された仏教、儒



教の伝統というものはあります。ありますけれども、外国から入ってきた思想として、しかもわれわれ日本人に強烈な影響を与えたのが今のプロテスタンティズムと共産主義であります。しかし、まだ一世紀に満たない短期間ですから、これが今後どのように展開され、あるいは評価されていくかということは、今のところ見通しはまだ不可能です。決定的な評価を与えることはできませんけれども、現にわれわれの思想を動かしている外来の思想としては、この二つが一番大きい問題だと思えます。

だいたいこの明治時代に、日本にプロテスタンティズ

ム、つまりキリスト教新教を伝えたのはアメリカの宣教師です。同時に北海道の場合は、北海道開拓技術者がキリスト教を伝道したわけです。そして札幌と横浜と熊本、この三つの部分に、キリスト教伝道の中心点をおいたわけです。これが明治の日本の思想界、あるいは文学界に、どういう影響を与えたか、非常に興味深い問題があるのですが、その中でも偉大なキリスト教信徒としてあげられるのは内村鑑三、それから新島襄、それから植村正久、これが明治における三大キリスト教信徒として、歴史に残っている人物です。この中で内村鑑三が、北海道の札

幌農学校の第二期生として十七才のとき入学して、十八才のときに洗礼を受けているわけですが、文学やその他の社会思想に大きな影響を与えたのは、やはり内村鑑三がその点では第一人者であったと思います。

ですからきょうは、この内村鑑三を中心として、明治のプロテスタントイズムと、それから文学の関係をお話する予定ですが、簡単に紹介しておきますと、内村鑑三は文久元年、一八六一年、高崎藩藩士の長男として江戸に生まれて、昭和五年（一九三〇年）七十才で亡くなっています。

ですから武士の子として生まれ、武士的な儒教教育を、幼年、少年時代に受けたわけですが、やがて一八六八年、明治維新に際会して、欧米にむかって国を開くとともに、技術者になろうと思って、札幌農学校に入りました。専門は魚の研究です。水産科です。だから本来は科学者であり、科学上の論文もありますけれども、札幌農学校滞在中キリスト教の影響を受け、それから生涯キリスト教の伝道者として、思想界に活躍したわけです。

明治の民族変貌期には、三つの大きな問題があります。そのうちの一つは、この明治における国民の思想的課題

はなんであつたか、それに対して内村鑑三初め、明治のプロテスタントたちはいかに応えたかということ。これが第一の問題です。

それから第二の問題は日本人の罪悪感、罪の問題、罪の意識です。日本人の罪の意識に対して、一大変革がもたらされたということです。

それから第三番目に、宗教と文学との関係についての、新しい視野をもたらしただということ。そのほかにもたくさんありますけれども、直接皆さんに興味深いと思われるのは、この三つの問題だろうと私は思います。

明治の国民的課題と申しますのは、民族の独立ということですが、一つの民族が外国に、つまりヨーロッパに国を開いて、そしていかにして独立を確保するかというところが、明治全体を貫いた基本的課題であったと言っていると思います。

ご承知の通り、そのころのアジア・アフリカは、ほとんど全部が植民地で、ヨーロッパ資本主義によって支配されていました。ただ日本だけが例外的に、極東の果ての島国であるという地理的条件もあつたと思いますが、日本だけが独立を確保することができました。しかし不



平等条約などが明治四十年まで続いていきますから、完全な独立というものは明治の末でなければ見られなかったわけです。いろいろな条約上、非常に不平等なものがたくさんある。でそれだけに民族の独立ということが一番大きな課題でした。

軍事国家のほうへ向かっていったわけですが、しかし民族の独立を確保する場合の精神的支柱をどこに求めるかということが大きな課題でした。

その場合二つの方向がある。一つは伊藤博文による明治憲法の制定であり、もう一つは内村鑑三たちによるキ

リスト教信仰の確立です。明治憲法というものの中心は、今の新しい憲法と違い、天皇神聖化ということが中心になっていきます。

明治憲法制定のとき、伊藤博文がヨーロッパ諸国を回ってきて、その帰ってからの感想に、「ヨーロッパの諸国を見ると、一方に議会政治があり他方に教会がある。そしてキリスト教というものが国民のバック・ボーンとあって、伝統としてずっと続いている」とあります。

ところでまた、日本が独立国家としてこれから立っていく場合に、なにを精神の支柱にするかという時、キリ

スト教をいきなり受け入れるわけにいかない。それから  
仏教はすでに衰微してきている。それから、古い神道も  
どうも役に立たない。どうしても国民精神を結合させる  
機軸、根本の軸として、天皇を神聖化する以外にない  
という意味をはっきり書いています。

それが旧憲法の第一条、第二条、第三条、つまり天皇  
は神聖にして侵すべからずという、天皇神聖化というも  
のがそこで行なわれ、天皇が民族独立の精神的支柱であ  
るという方向をたどったのです。と同時に、国家権力と  
結びつき、また軍事国家として成長していくときの一つ

の機軸になったのです。そしてそれが敗戦の日まで続いたのです。

これに対して、明治になってから、キリスト教新教が入ってきたのですが、プロテスタント新教こそ、独立国日本の精神の支柱にすべきではないかと、非常にはっきり確言したのが内村鑑三です。

内村鑑三に即して考えますと、三つの大切な問題が出てきます。そのうちの一つは、こういう問題です。

われわれはよく思想という言葉を使います。しかし、思想とはなにかと問われましても、簡単に答えることが

できません。けれども、日本の歴史や西洋の歴史を見てはつきりわかることは、すべて思想と呼ばれるものは、その根本において、神との対決を得なければいけない。神を肯定してもいいし、否定してもいいし、また疑ってもいいし、また絶望してもいい。とにかく神を信ずるか信じないかという心の戦い、それが思想というものが成立する根本の条件であるということです。

日本には仏教が入ってくる。そうするとその仏教を信ずるか信じないかということ、いろいろ心の戦いを続けた歴史が過去にある。それからヨーロッパや、アメリカ

カの場合でも、キリスト教というものが、やはり中心と  
なって、それをめぐっての思想的対決というものが発生  
しているわけです。ですから厳密に申しますと無神論で  
す。無神論は神の完全否定の上に成立するものであり、  
また共産主義の根本は無神論です。そうだとすれば、共  
産主義が成立するということは、それ以前に、その人が  
神を否定するためにはどれだけの精神的、内的な戦いを経  
験したかということ、それが前提にならなければ無神論  
というものは成立しない。現在の日本の共産主義の最大  
の欠陥というのが、徹底的な無神論者の経験というもの



を持たないということです。たいてい共産主義者、あるいは共産主義に同感する人は神を認めないという。認めないためには神と対決しなければならぬけれども、そういう経験なしに認めないということは、要するに無関心だということなんです。ですから現代の日本には、厳密に申しますと無神論者というものは存在しないし、無関心論者と無知があるだけです。そういう非常に強烈な否定的精神というものを生み出すのが、キリスト教信仰の一つの特徴です。徹底的に信じるか、あるいは徹底的に信仰を拒否するか。その戦いというものを経験しない

限り、思想が成立するはずがありません。

だいたい明治以後の私たちの最大の欠陥、ことに日本の文学者の最大の欠陥というのは、宗教との対決能力を欠如しているということです。これはある意味で、日本の伝統の欠陥ともいえるわけです。思想といえますと、皆さんはなにか非常に理論的な膨大な体系とか、抽象的思索力とか、そういうものをお考えになると思いますが、むしろそれは大切なことですが、たとえばこういうことをお考えになると一番いいのではないかと思えます。

あるところに、まったく無学文盲の女性がいたとする。

教養もなければ学問もない。男に振られて、これから生きていこうか死のうかと考えつめる。思いつめて思いあぐむ。そういう女性がいたとします。そうしますとその女性は、たとえ無学文盲であっても、思想家としての基本的条件は備えている。生きるか死ぬかというところに自分を追いつめるのですから、自分の生というものを肯定するか否定するかという対決に自分を追い込む。これは思想家というものの基本的条件です。たとえ無学文盲であっても、この女性は思想家たる第一の資格を持っていると言っていると思います。

現代の日本には、評論家はたくさんいますけれども、思想家は一人もいないとよくいわれるのは、この無学文盲の女のように、自分の運命を思いつめて考える能力というものが、欠如しているということです。

外来の思想についていろいろ説明し解釈する。そういう意味での思想のカン詰業者はたくさんいますけれども、自分で、素朴ながら自分を追いつめて行って、そして肯定、否定も、この対決というものの中で鍛えられていくという訓練が、われわれは欠如している。これは全体としていえる。今日一番反省しなければならぬ私た

ちの欠点だろうと私は思っています。

その根本には宗教との対決がない。そんなことをしなくてもいい、それが当たりまえだというふうな、これは一種の思想的怠惰です。

そういう点から、内村鑑三なら内村鑑三という人をふり返ってみますと、明治にまずそれをやったわけです。

西洋文化を受け入れるということは、西洋の文化の一番根本に対して自分がどういう態度をとるべきであるかということ、自分に問いつめることなのです。

西洋文化の根本は、いうまでもなくギリシヤ精神とキ

リスト教精神です。ですから内村鑑三はギリシヤ的精神  
というものを否定している。そしてキリスト教精神とい  
うものに自分は強烈に没入していくわけです。この対決  
というものを内村鑑三がやった。そこに彼のキリスト教  
信徒であるにもかかわらず、キリスト教というものを越  
えて、当時の日本の思想界に大きな影響を与えた根本の  
原因があると私は思います。こういう大事な問題を提出  
した人として、内村鑑三を思い出す必要があります。

それはなにも肯定するだけでなく、否定したっていい  
わけです。また疑ったっていいわけです。どうしてもわ



からなければ絶望してもいいわけです。

肯定、否定、懐疑、絶望というふうな精神は、そもそも根本に宗教との対決なしにはあり得ないものだという  
ことを、内村鑑三のものを読んでみますとよくわかりま  
す。これがまず第一の問題です。

それからもう一つの問題は、日本の伝統です。今度は  
逆に日本の伝統に対して、彼はどういう態度をとったか  
ということ。皆さんも西洋の美術やいろいろな文学  
を勉強する場合、必ず西洋の根本になるものに対しての  
自分の態度を決めると同時に、つまり自分の国の伝統に

対しても、自分の態度を決める必要があります。

内村鑑三はどういうふうに決めたと申しますと、それまでの日本の伝統として古い神道、神ながらの道というものがあります。これは仏教が入ってくる前からあったのです。それからもう一つは仏教です。これに対して自分はそれならば、どういう態度をとるか。これは日本の伝統の特殊性と関係がありますが、キリスト教の場合には神様が一つしかない。エホバ、唯一絶対神エホバ、その神の子のキリスト、これだけです。ほかになにもないのです。

ところが内村鑑三が、自分でも書いておりますが、神社といっても八百やおよろず万の神々といつて、八百万の神様がいる。それから仏様といつても、いろいろな仏様から菩薩から天女から、いっぱいいる。一種の日本の宗教といふのは汎神論的、あるいは汎物論的性格を持っている。つまり一種の多神教なんです。多神教という名称も不適當なんで、とにかくやたらに神様と仏様がいる。そしてもし真面目にこれをおがむつもりならば、どこの神社、どこのお寺の前でも、いちいち頭を下げなければならぬ、一体そんなばかなことができるかということ、内

村鑑三は言っているわけです。

軽蔑するのではなく、ほんとに信ずるならば、この八百万の神々と、実に多くの仏像と、そういうものをいちいちおがまなければならぬことになる。それは間違じやなからうか。たった一つの自分の信ずるに足る神というものがどこかにあるはずだと、十七才の少年が考えたわけです。

しかしどうしてもキリスト教というものに入っていけない。どうも邪教らしい。それで札幌神社にお参りして、このキリスト教という邪教をどうぞわが国より追い払い

たまえといつて、お祈りする場面がある。迷うわけです。非常に若いのにちゃんときつめて考えています。そして到達した結論が、日本の神道の神々はあまりに多く、雑然として存在している。これはある意味では日本の伝統の特徴です。ただ一つのものを信ずるのではなくて、いろいろなものを同時に信ずる。いい意味では抱擁性があるし、大へん平和的共存の上手な民族であるともいえるのですけれども、これは、私たち日本人が思想的にルーズだといわれる根本の原因でもあります。

その結果そういうふうなことを考えて、内村鑑三は純

粹な信仰を持ちたいと思つたのです。純粹な、ただ一つのものに、自分を打ち込めるようなものを持ちたいと思つたのです。

そこへちようどキリスト教が入ってきて、上級生や宣教師などに教えられて、洗礼を受けるわけです。それが出発点です。それは彼の十八のときです。それが第二の問題点です。

それからもう一つ、こういう大事な問題があります。内村鑑三のような人は、今のような形でキリスト教信徒として出発していくわけですが、この内村鑑三と正反対



の精神、全く正反対の精神を持った人の中で、一番代表的な人物は誰か。これは森鷗外です。

森鷗外はご存じの通り軍医総監で、陸軍中将で、一種の官僚です。だから露骨にはいわないのですけれども、その森鷗外の小説に「かのよう」に」という小説がありました。神様がいるかのよう……のかのようです。

ですから鷗外は、はっきりは言っていないのですが、彼は心の中で、天皇の神聖化というものを認めなかったに違いないし、神というものを信じなかつたに違いない。しかし当時はつきり言うとは、これは危険思想です。だか

らはつきり言わないで、あるかのように……なんとなくおがんでいりやいいじやないか、というのが鷗外の本心なのです。

今と違って、言論の自由な時代ではなかったし、天皇制国家によって非常に検閲が厳しい時代で、おまけに日本人が軍人なので、それを露骨には言っではない。

露骨には言っていないけれども、「かのように」を今読んでみますと、彼こそ日本における最大の無神論者たる性格を持っていた作家です。これが鷗外という人の非常

に面白いところです。

この内村鑑三と森鷗外のまん中にはさまって、もたついている人が一人いるのです。それは正宗白鳥です。

正宗白鳥は、植村正久に洗礼を受けています。そして内村鑑三の講演や、説教を熱心に聞いたのですが、どうしてもついていけない。どうもキリスト教のなかへ内村鑑三のように没入できない。

だから、正宗白鳥の懐疑精神と呼ばれているものは、青年時代に洗礼を受け、そして神を信じようが信じまいが、その迷いというものが絶えずあったために、形成さ

れたものです。ですから明治以来の作家の中で、正宗白鳥が一番尊敬しているのは森鷗外です。しかし彼は森鷗外のようにもなれないのです。それから内村鑑三のようにもむろんなれない。絶えず両方が気になりますから、今でも内村鑑三のことを絶えず書いているわけです。鑑三をやっつけては書きやっつけては書きしているわけです。ここに正宗白鳥という人の一つの青春というものがあるのです。

ですから内村鑑三と、森鷗外と、正宗白鳥の一、二冊代表的なものを読んでほしい。たとえば内村鑑三の「予

はいかにしてキリスト信徒となりしか」、あるいは「求心論」という本と、鷗外の「かのように」や、歴史小説などと、正宗白鳥の「内村鑑三論」というものがあります。こういうものを皆さんがお読みになりますと、そこに明治における非常に重要な精神の課題が、一つでき上がってくるのです。

内村鑑三の弟子はたくさんいるわけで、有島武郎もそうです。今生きておられる方では志賀直哉氏がそうです。キリスト教の洗礼を受けた文学者はそのほか、北村透谷がいますし、島崎藤村とか、あるいは小山内薫という人

もそうですし、徳富蘆花も内村鑑三の影響を非常に強く受けています。自然主義文学から白樺にかけて、内村鑑三の影響を受けた人は非常に多いのです。実際に洗礼を受けたか受けないかは別として、強い影響を受けています。

今お話ししましたように、明治時代の文学者にとっては、明治における民族の独立、その場合の精神的支柱はなにかという基本的な問いがあつて、一方、政治的には明治憲法というものが成立して、天皇神聖化が行なわれ、それから在野（つまり官僚や軍人でない民間）からは、

キリスト教精神というものが、民衆の側からの信仰を求めるといふ形で展開されていったわけです。

ですからある場合には、社会主義とも結合します。日露戦争のときは内村鑑三は、幸徳秋水等と組んで、反戦論を唱え、そのとき勤めていた新聞社と一緒に辞職しています。共産主義者とも、ある場合は連合戦線を築いています。ですから根本は民間の自由人として最も純粹なキリスト教信者としていこうとすれば、徹底的な反戦論者たらざるを得ない。そういうふうな形で流れていくわけです。

以上内村鑑三の提出した問題として私は三つあげました。まず、神との対決、信仰というものが、思想形成の根本になければならないということと、今までの日本の宗教的な伝統に対して彼がどのような反発したかということと、内村鑑三をめぐって、その対照的な精神というもの、やはり森鷗外に現われているということの三つです。この鑑三、鷗外、白鳥の関係だけでも、私は文学史上の非常に重要な課題だと思うのです。

今までの日本の文学史には、こういうことが全然書かれていない。文学史だから、文学だけでいいと思ってい



る。それではやっぱりいけないと思うのです。宗教や思想との対比において、文学というものを語っていかなければいけない、というのが私の考えです。

ところで、民族独立ということが根本にありますから、内村鑑三のキリスト教精神はすぐ愛国心と結びつく。彼ほど愛国心というものを強調した人はいないので。しかし、内村鑑三は天皇制国家、あるいは軍事力と結びついた愛国心ではなくして、キリスト教信徒としての、日本人としての愛国心というものを非常に強く主張して、日本を理想の国にしなければならぬといっているのです。

す。もし精神的意味で理想を具体的にあげるとすれば、それはキリストであり、国としてそれをあげるとすれば、それは日本であるというふうな言葉でいっています。

そして彼は、日本及び日本人の可能性というものに対して、非常に強い希望を持っていました。そしてその根本に、キリスト教精神がなければいけないということをし、繰り返して述べているわけです。

私は日本の宗教的伝統に対して、彼がいかに反撥したかということを行いました。具体的には伝統的な意味で日本人の罪悪感に彼がいかに反撥し、そしてキリスト

教的な意味での罪の観念というものが、どういう意味を  
当時において持っていたかということが、次に問題にな  
ります。

日本人の、この伝統的罪悪観念というふうなもの、こ  
れだけとり上げても、独立した一つの大きな問題になる  
のです。

サンソノという人に「日本文化史」というのがありま  
す。サンソノという人は英国の歴史家です。それを読ん  
でみますと、日本の歴史を勉強していて一番理解できな  
いというか、困惑するのは、日本人は昔から罪悪観念と

いうものが非常に稀薄である。それを痛感するということを言っています。

これはキリスト教的観念からみますと、日本人の伝統的罪悪観念というのは確かに稀薄なのです。

仏教が入ってくる前、日本には神道がありました。神道にも、むろん罪というものがありました。その罪を徹底的に深めるといふことはしないのです。

神官の払いによって罪を清め、罪を川より海に流すという形式をとる。その罪の内容も、西洋とは非常に違って、主としてそれはけがれです。不潔なもの、みにくい

もの、けがれたもの、これが罪とされていることが特徴です。

その罪に対して、神官がいろいろ神様に捧げものを上げてお払いをし、祝詞を上げる。それで罪は払われてしまふ。そして、「速さすらいの神」というのがいまして、その神が罪を背負ってどこかに消えてなくなる。川とか水の中に流れて消えてしまふ。これはキリスト教にも仏教にもない、日本の神道だけの特徴です。

このような罪の意識は今でも私たちの心の中にあります。たとえば過去に過ちを犯したり、あるいは罪を自覚

していても、私たち日本人は、それを水に流しましょう  
と言います。水に流しましょうというのは、古代の祝詞  
の影響です。

神道には水に流すというような発想で罪を解消する面  
と、もう一つは罪を美化する傾向があります。

これは古事記からでも、万葉集からでも例は幾らでも  
あげられます。たとえば源氏物語の光源氏です。犯して  
はならない女性を犯すことによつて、みずから須磨、明  
石へ流れていく。それは確かに罪なのです。ところがそ  
の罪を、ああいう立派な文学に仕立て上げて、それを賛

美する傾向がある。その次に、仏教が入ってきます。仏教では罪というものを明確に規定して、これとこれとこういう罪ということをはっきり書いています。その点は神道とは段違いに体系化された宗教ですが、私たち日本人がそれを受け入れる場合、無常観で受け入れます。これは日本人の感情の中に、さっきの水に流すと一緒に入っているのが、無常観だからです。これが日本に入って参りますと、感情化されて、無常「観」が「感」になります。

それが今後は「哀感」になって、更に「美感」という

ふうになる。そしてこれが風流になるのです。ですから罪も風流化されるといふ傾向を持っています。

仏教はなにも、無常観からだけ成り立つものではありませんけれども、日本人は無常観という面を非常に強く受けるのです。

感情的に無常観の観が感になり、哀感になり、美感になるといふ形をとって、たとえば西行、芭蕉のようにさすらいの旅に出る。罪を犯したものが、その罪の解消がさすらいという形をとる。それからまた日本人の好きな物語、あるいは歌の調べの中に、さすらいの調べという



ものが濃厚に入ってくる。これが私たち日本人の伝統的精神の特徴です。

ところがキリスト教は、全然違ったものです。罪の觀念というものは非常に明確です。私は内村鑑三の書いたものの中で、一番好きなのはモーゼの十戒ですが、これとこれとこれを犯してはいけないということが、はっきり書いてある。「モーゼの十戒」と申しますと、要するに、エホバがモーゼに与えた十のいましめで、キリスト教信者として犯してはならないことを十あげているわけです。そのうちの第一が汝、つまり自分を信ずる人々に

向かっていう言葉です。——汝わが顔の前に我のほか何物をも神とすべからず——唯一絶対のエホバである自分だけを信じなければいけない。そのほかを全部信じてはいけない。こういう厳しい掟は、日本の神道にも仏教にもないのです。

——汝わが顔の前に我のほか何物をも神とすべからず——これが「モーゼの十戒」の第一戒です。第二戒は——汝己のために何の偶像をもきざむべからず——偶像をきざんではいけない。第三は——汝の神エホバの名をみだりに口にあぐべからず——みだりにその神の名前を

乱用してはいけない。第四は——安息日を覚えてこれを清く守るべし——日曜には必ず休まなければいけない。十戒のうちこの四戒が神への義務。

それから第五が——汝の父と母とを敬うべし——第六が——汝殺すなかれ——第七が——汝姦淫するなかれ——第八が——汝盗むなかれ——第九が——汝その隣人に対して偽りの証を立つるなかれ——第十が——汝その隣人の妻をむさぼるなかれ——これが「モーゼの十戒」です。

そしてここには神様は一つしかいない。エホバ、そし

て、その神の子であるキリストと。

内村鑑三がこの十戒を読んでみて日本の神道を顧みたり仏教を顧みたりすると、どうもそこに罪の観念というものがある、稀薄であると感じたわけです。ところで、人間として罪というものをもつと明確に自覚する必要があると考え、「モーゼの十戒」をさらに展開していったのがキリストです。

たとえば第七の——汝姦淫するなかれ——これは旧約聖書にあるのですが、新約聖書ではキリストの言葉として——色情を抱いて女を見るもの、心のうちすでに姦淫

せるなり——というふうには内面化されるわけです。つまり実際に姦淫すると、それは立法上の罪になる。しかし実際に姦淫しなくても、——色情を抱いて女を見るものは、心のうちすでに姦淫せるなり——といったときに、罪というものは初めて内面化されるわけです。

表面には現われないけれども、人間というものは心の中で犯す罪というものがある。こういう罪の内面化という点では、キリスト教というものは非常に深いと思います。そこで非常に興味深いのは、こういう「モーゼの十戒」を内村鑑三が、一体どういうふうには日本人に向けて

展開していったかということですが。

——汝殺すなかれ——この殺すなかれにも、二つ意味があります。「モーゼの十戒」では、実際に人を傷つけ、殺すことが罪であるとされている。むしろそれはそうです。しかし先ほどのこの姦淫の問題が、イエス・キリストによって内面化されたように、殺すということも、これを心の中で犯す罪として考える必要があるわけですね。なぜならば、人間というものは全部嫉妬心、競争心を持っています。皆さんもそうだろうと思いますが、競争心を持っていきますと、必ず自分の相手が死ねばいいとか、傷

つけばいいとか、失敗すればいいとかいうふうには、ライバルの死を予想するものです。嫉妬心というものは、実際にそれを行なえば殺人になりますけれども、心の中で相手を殺している分には罪にはならない。しかし宗教的には、それは罪だということになります。

そういう内面化の問題を内村鑑三は追求し、それを追求していくと同時に、内村鑑三は、それを社会問題として、とり上げていったということなのです。

というのは、たとえば——汝殺すなかれ——についての内村鑑三の解釈です。

現在、世界の視聽を集めているのは労働問題です。自分はもちろんこの問題に対しては素人に過ぎない。しかしたった一つ明確なことがある。今日に至るまで、資本家または工場主が、罪のない男女工の生命を奪ったものが幾人いるだろうか。欧米においてはすでにこの事実に注意を払い、工場法を施行したけれども、実際それについてみると、恐るべき弊害がある。たとえば紡績工場、あるいは刃物製造工場のごとく、そこから飛び散る粉などによって、職工の肺の中にそれが入って、数年のうちに病気で倒れるような場合もあるし、また鉱山では鉱毒



事件を起こしている。多くの工場主がこれらの人々の生命を犠牲にして、その工場の繁栄をはかっている。これは殺人罪である。こういう解釈の仕方です。

ですから当然、社会主義と結びついていきます。むしろ内村鑑三は社会主義者ではなく、純粹のキリスト教信徒なんですけれども、「モーゼの十戒」というものを、こういうふうに解釈してきますと、この点で今度は、社会主義と共同戦線を張る可能性が発生してきます。

それからもう一つ——汝姦淫するなかれ——これが宗教と文学の問題に関係して、非常に興味深いのです。さ

つき話しましたように内面化すると同時に、今度は芸術全般に当てはめていくわけです。キリスト教の家庭においてには青年に対して、二つの禁すべきものがあると鑑三はいつています。

「その一つは芝居を見ること。演劇は決して悪いものではなく、ハムレットもマクベスもみな演劇ではないかというだろうが、多くの家庭破壊が劇場から始まるのは事実の証明するところである。青年の教育上、この劇を見ることは決して奨励すべきことではない。その二は小説である。小説にもまた美しいものがないわけじゃない。

しかしながらこの名において、幾多の尊い、固い家庭の破壊されているのを知るならば、子弟の手に小説をゆだねるのは大へん危険なことである。芝居を見るといい、小説を読むといい、その中にはまれに、偉大にしてまた美しいものがあるかもしれないけれども、だいたいにおいてこれは体質上、姦淫の罪を誘惑するものである」こう彼は書いています。

この辺までできますと、今度は侍の面影が出てきます。儒教教育の影響、コチコチの、なんといいいますか頭の固い、頑固な儒教教育を受けた侍の面影が出てきます。こ

れがまた内村鑑三の興味深い点です。

青年に向かつて、「芝居を見てはいけない」、「小説を  
読んではいけない」というようなそんな頑固おやじは、  
今はいなくなつたのですが、いなくなつたことは一面は  
けっこうですけれども、他方において厳格な信仰が消滅  
したと言えるところです。

有島武郎でも、正宗白鳥でも内村鑑三がそういうこと  
を言うから反撥したわけですが、そこから宗教と文学の、  
微妙な接触と対立が、提出されてくると思います。

とにかく芝居でも小説でも、だいたいにおいて姦淫の

罪を犯すものであり、しかもそこへ誘惑するものであるという断定の仕方です。そこに内村鑑三の性格が端的に出ていると思います。

日本文学、明治以後の文学の中に、内村鑑三のような意味での罪悪観念というものを取り入れようとした作家というのは非常に少ない。有島武郎の「或る女」というのは、そういう点で一つの注目すべき作品です。

そして内村鑑三の考えたような罪悪観念を、それとは多少違ってきてはいますが、自分の小説の中に、積極的に取り入れようとしたのは、やっぱり太宰治です。

太宰治の罪の観念というのは、やはり厳格なキリスト教の立場から言いますと、誤りがあります。どういふ点に誤りがあるかという点、自分で自分を裁くという誤りを、太宰治は犯している。罪というものを断定するのは、人間の能力としては不可能です。それは神によってその罪を自覚せしめられる。われわれ人間が努力して、自分で罪悪感というものを抱くのではなくて、神の、具体的には「モーゼの十戒」によって、その罪というものが示される。そしてその罪に対して、人間として可能なことは祈るといふことです。これがまあ正当的なキリスト教

の考え方です。

太宰治も、むろんそのことはよく知っていたのですが、やはり自分を罪あるものとして苦しめながら、同時に、そういう自分を自分で裁こうとしたところに、太宰治のキリスト教に対するいたらなさがあるのです。

しかし、そこから文学というものが発生してくるので、すから、そこが非常にややこしいところでは。

さて宗教と文学の問題に入りますが、日本の伝統に即してお話ししますと、先ほどの、神様がたくさんいたり、仏様がたくさんいたり、それから罪の観念というものが、

今お話ししたような特徴を帯びている日本ですから、日本人の文学では文学と宗教とが徹底的に対立するというふうな例は、ほとんどないと言っていると思います。

お坊さんが平気で恋歌を詠んだり、それからまた歌よみが、半ばお坊さんであったりして、文学と宗教との激しい対立というのは、日本の歴史にはないのです。

しかしキリスト教の場合になりますと、それが非常に明確になってきます。内村鑑三は、ゲーテと源氏物語を否定しました。これは非常に興味深いのです。

私は学生のころドイツ文学、ドイツ語をやりました。



ゲーテのものなどしきりに読んだのですが、ゲーテは異教徒と呼ばれ、厳格な意味でのキリスト教信者ではないといわれています。どういうところに彼の考え方が現われているかといいますと、エツカーマンとの対話の中にこういう言葉があります。『宗教は他のすべての題材と同じく、単に題材として開発されなければならない。信仰も不信仰も、芸術品を理解する機能ではない。芸術を理解するためには、むしろ全然違った人間の力と能力が必要である。しかし宗教的な材料はまた美術の立派な題材になる。しかしそれも、一般人間的なる場合だけであ

る。だから子供を抱いた処女は全く立派な題材である。』  
これが厳格なキリスト教信徒の立場から見ますと、非常にけしからん言葉になるらしいのです。こういう点の感じ方が、私たち日本人にはヨーロッパ人と違いまして、キリスト教の伝統がありませんから、あたりまえだと思つて読んでおりますが、厳格なキリスト教の信者からみれば、「唯一の神エホバ、その一人子であるキリスト。そのキリストを生んだマリアを子供を抱いた処女とは一体なんだ」こういうにちがいないのです。これはマリアに対する冒瀆ではないか。

芸術のためには、宗教というものは単なる題材にすぎない。だから子供を抱いた処女は、全く立派な題材であるというが、一体宗教を題材化していいのか。これは当然潔癖な信仰の立場から、そういう質問が出るでしょう。

今度は美術を作る人、芸術家の側からはまた反論が出るわけです。芸術というものは、これはもう信仰の対象になるものではなく、いかにそれが美しいか。つまり徹頭徹尾、芸術というものは虚構の世界です。だからある場合には聖者を描くし、ある場合には処女を描くし、ある場合には泥棒を描く。なにを描いたっていい。作者は

そのために、いちいち泥棒になる必要もないし、聖者になる必要もない。

たとえばここに一人の作家がいて、その人が非常にみごとな宗教家の姿を描いた。ではその作者はどうか。作者は宗教なんか信じてやしない。信じてやしないけれども、作品の、つまり虚構の世界の上で、本当の宗教家を描いたということによって、その人は作者としてすぐれている。これがいわば文学の立場です。ところが宗教は違うのです。宗教は根本的には虚構の世界ではなくて、行の世界です。修行の世界です。だから自分自身が一個

の人間としてよくなるとうとする祈りというものがなければ、宗教的には認められないのです。たとえどんな立派な作品を書いても、その作家がその生活においてだらしがない場合には、宗教的には否定されるべきです。そこで全く反対のものが文学に出てくるわけです。ところが両方は、兄弟のように密着しているところもあるのです。どういう点で密着しているかという点と、どちらも人間性の深さというものをたどらなければならぬ。つまり人間の中の悪です。

先ほど申しました心の中で犯す姦淫の罪とか、人を殺

す罪とか、そういう、人間ならば誰でも持っているその人間性の暗黒面というものをよく見なければ、宗教というものは成立しない。同時に文学も成立しない。しかも文学の場合、それを表現する場合、それはどこまでも虚構の世界にすぎない。宗教の場合には、自分の心の中の悪を解消するように、自分が日々修行し、神に祈り、実行し、人間としての徳というものをみがいていかなければならない。そこで宗教と文学は非常に密着しているが、同時に反対のものがそこから出てくるのです。これがキリスト教の場合には、非常に明確になっているわけ

です。

たとえばカソリックの作家がいます。カソリックの作家というのは、必ず心の中で矛盾を持っている。なぜならば、作家である限りは、たとえば姦通を描いてもいい。それは描かなければならない。人間性というものに結びついていきますから平気で描く。作家としては……。

しかしカソリックの信者としては、姦通を描くことによって、人々に姦通をしようというふうな気分を起こさせることは、イエスのいましめに反するわけです。モーゼの第七戒、——汝姦淫するなかれ——に、明らかに反

する。明らかに反するけれども、それを書かなければまた作家としての役割を果したことになる。こういう激しい矛盾というものを課せられたところから、西洋の作家の、思想的偉大さというものが発生しているのです。その一番大きなのがトルストイです。

トルストイは、「戦争と平和」とか「アンナ・カレーニナ」とか、いわゆる芸術的作品というものを否定してしまつて、晩年には厳格なキリスト教信者として、「クロイツェル・ソナタ」という作品を書いています。これは人間のセックスというものが、いかに暗澹として、ま



た救いがたいものであるか。そのセックスの深さを描こうとして、徹底的に姦通の場合を描いているものです。「クロイツェル・ソナタ」は、否定するためを描いているわけです。神の名において、姦通というものを全面的に、またある場合には、結婚そのものも否定しています、そういう作品です。

ところが、それを読んでみますと、他の作家の姦通の場面よりも、もっと生々しくてエロチックで、そこにフツと、トルストイの芸術的才能が現われてきています。一方ではそれを否定しているわけです。そして一方で

は、芸術的作品としてすごい作品ができています。こういう二律背反といいますか、内的矛盾というものが作家を鍛えるのです。この訓練が日本には全然と違っていいほどないので。

キリスト教のような、唯一絶対神というものを設けて、それを肯定するか否定するかという、いわば対決力というものの、対決の精神というものが、西欧の作家の心に影を投げかけています。そうした矛盾の機能の深さという点で、西洋の近代作家は非常にすぐれています。こういう矛盾を非常に深く自覚して、悪戦苦闘したのは、だい

たい日本の場合には中世の僧侶たちです。

源信から始まって法然とか、親鸞とか、日蓮とか、道元とか、非常にすぐれた、純粹の宗教家が鎌倉時代に生まれましたが、それはみな芸術家じゃないのです。けれども宗教家として、こうした矛盾に苦しんだ典型的な人物です。

それがこの明治以後になりますと、今お話ししましたように、内村鑑三の中に現われてきている。ですから内村鑑三が、外国の作家で誰を尊敬しているかというところからダテであって、ゲートはけしからんというのです。たと

えば「ファウスト」の第一部を読みますと、グレートヘンという若い娘を犯して、子供を生ませ、グレートヘンはその子供を殺し……一人の少女を、非常に残酷な目にファウストはあわせる。もちろんファウストは心の痛みというものを感じて、山へのがれ、そこで静かな空気を吸い、自然の中でもう一ぺん復活していくという場面があります。ところが内村鑑三は二人の女を犯した男は、徹底的に懺悔して神を信すべきであるにもかかわらず、そういう景色のいいところへ行つて、横になつて生き返るとは何事だ。こんなゲーテなんてものは変節漢であり、

冒瀆漢である。だめだ」というのです。

それから「源氏物語」がけしからんという。これなどはおそらく内村鑑三は、「源氏物語」を読んでいなかっただと思うのです。どうも平安朝というものが憎くてたまらないらしいのです。「だいたい十二単衣を着て、ああいう長い髪をして、色好みの世界を描く。一体これが日本人の士気を高める上にどう役に立つか」と言っています。士気を高めないと言うのです。日本人を女々しいものにしてしまった「源氏物語」のような作品は根こそぎ絶やしたい、とずいぶんむちやなこと言っています。

しかしこういうむちゃなところが面白いのです。

要するに色好みの世界——姦淫とか姦通とかいう、文学の大事な主題に対して、内村鑑三という人は、必要以上には潔癖になって、そういう作品に対して挑みかかるのです。それが極限までいきますと、文学に対して非常に偏狭な態度になって現われてくる。ところがそういう内村鑑三が、明治文学の中で一番すぐれた文体を持っているのです。非常に立派な文章です。

だから正宗白鳥が言っています。「内村鑑三が、もし日記を書いたり、その他文学的文章を書いたら、おそら

く他の明治のいかなる作家も及ばないほど、立派な文学作品ができたであろう。しかしああした意固地のために、遂にそういう才能を伸ばさなかつたのは、はなはだ遺憾なことである」と。

明治、大正、昭和をとおして、日本語で一番すぐれたものを書いたのは、私の考えでは内村鑑三と森鷗外だろうと思います。非常に力強く、実に男性的な、張りのある文章です。そして肯定、否定が非常にはっきりしています。ああでもない、こうでもないという曖昧さがないのです。キリスト教だけを信じているのですから。

われわれキリスト教信者でないものからみますと、そういう点が少しうるさいし、そんなに信じなくてもいいではないかと思うぐらい、熱烈に信じている。そこからきた輝やくような強烈な文章というものを、内村鑑三という人は、明治時代に創造しています。

宗教と文学の問題について、心の中の矛盾、二律背反というものを、西洋の作家は痛感していたということをお話ししましたが、その点をもっともはっきりと示したのが、キエルケゴールです。

「死に至る病」の中にはこういう言葉があります。



——詩人的実存はいずれも罪である。罪とは存在するかわりに創作し、ただ空想の中にのみ善と信とを問題にし、実存的にそれであろうと努力しないことである——

これは先ほど私がお話ししましたように、宗教の世界というものは行、修行する世界です。実質的に自分がそうなるうと努力しなければいけない世界です。そういう目から見ると詩人的実存、これは芸術家と言っていると思いますが、芸術家とは罪人だと言っているわけです。この場合の罪というのは、存在するかわりに創作することです。だから空想の中でだけ、善とか信を問題にして、

自分自身がそうなるうと努力しない。だからすべての芸術家は、厳格な宗教的立場から見ると罪人である。こういう言葉です。

厳格な宗教的立場からすると、すべての芸術家というものは、罪人であるということとは、私はいえると思う。なぜならば、本人はぐうたらであつても、泥棒であつてもなんであつても、いい詩を作ればいいというのですから。

そういう厳格なものが日本の伝統にはなかつた。なかつたけれども内村鑑三という人が現れてキリスト教の立

場から、非常に一つ一つ明確にしていっていったわけです。もちろん片寄っているようでもあり、人によっては、ずいぶん偏狭だという人もあるでしょう。

けれども、内村鑑三という人は、絶えず自分の心の中で矛盾を感じ、常に対決の心で生き、その矛盾や対決の苦しさを超えようとして、強烈な、さらに強烈な信仰をもとうと苦しんできた人なのです。

そのような人ですから、鑑三の影響を受けて、明治の社会主義者幸徳秋水や、後に第三インターナショナル執行委員になった片山潜もキリスト教の信者から出発して

いるし、日本の社会民主主義の育ての親といわれる安部磯雄氏もキリスト教の信者です。

その系統が今の社会党の中にも流れています。河上丈太郎氏もクリスチャンですし、そういうタイプの人がいる。それから自然主義文学者、それから白樺派の人たちは、非常に内村鑑三の影響を強く受けています。

ところが一旦若い時キリスト教の洗礼を受け、あるいは内村鑑三なら内村鑑三の教えを聞いて非常に感動しても、これらの文学者は、キリスト教信徒として終始一貫した人は一人もいないのです。みんな途中でやめる。や

めるならやめてもいい、しかし一旦信じたものをやめるということとは、その人にとっては思想的大事件でなければならぬし、その思想的大事件は作品の内容にならないければならないはずだと私は思います。

わずかにそれをやっているのは有島武郎の「ある女」です。あの中には内村鑑三がモデルになって出てきます。つまり背徳の美しさを描かざるを得ないのです。背徳者なのですから。一ぺん信じてそれをやめるということは、それこそ百八十度以上転向したということですから、キリスト教の立場からいうと、背徳者、背信者になるので

す。

その背徳とか背信の苦悩というものも当然作家は担わなければならぬ。それが文学の主体になった時に、はじめて文学というものは、今度生きてくるといえるでしょう。それが無いのです。それが日本の文学には非常に稀薄なのです。

このことは無理もないことで、なにしろ明治になってキリスト教が入ってきてまだ百年にもならない。そういう伝統もないところで、いきなり私が今のような意見を出すということは行き過ぎだとも思います。けれども、

伝統がないからということを利用して、われわれが自分の心の戦いを放棄するということはやはりいけないと思うのです。

背徳者の苦悩というものが当然描かれなければならなかったはずにもかかわらず、それが描かれなかったということは、明治、大正文学の一つのブランクです。キリスト教というものが全然なかったならそれでもいいのですが、一旦青春時代にそれを受け入れて、それを途中で放棄して文学をやった。これはやはり注目しなければならぬ大きな問題だと思うのです。

それは仏教の場合でも、共産主義の場合でもそうだと思います。ある時期にそれを信じた。そしてある時期にそれから離脱していくということは、精神の非常な大きな苦闘をみずから背負うということです。これが先ほどの対決という問題につながっていきます。信じるにしても信じないにしても、あるいは疑っていくにしても、十年も二十年も、そういう自分の心の苦悩というものを追求するということが、私達の文学的精神を鍛えることにもなるし、また宗教的精神を鍛えることにもなると思うのです。



こういうことがそのまま、つまり空白状態で今日まで続いてきています。

戦後文学というものは非常に変質してきましたが、皆さんも御承知のとおり、こういう主題に取り組んでいるのは太宰治が死んでからあとは、椎名麟三とか遠藤周作とか、カソリックやプロテスタントの作家が若干やっているだけです。こういうことは日本では例外とっていいし、すべての人が宗教と取り組む必要もないとは思いますが、しかし一番根本に今のようない問題が、まだ空白のまま残されているということなんです。これがやつ

ぱりこれからの文学にとって、一つの大きな課題になりはしないかと思えます。これは文学だけでなく、同時に社会思想の一つの大きな課題になりはしないかと思うのです。

なぜならば、社会主義あるいは共産主義というものの一番根本の精神が無神論ですから、無神論者としての対決の戦いの経験というものがなければ、本当の無神論者たり得ないというのも、これはあたりまえの話で、この点も、今ブランクのまま残っていると思えます。

そのことを今度は逆に、皆さんが日本の伝統文化につ

いて考える場合、その伝統文化を一体肯定するのか、このままでもいいのか、どこかに非常に大きな欠陥がありはしないかと考えることが、日本の古い美術とか、そういう伝統文化を勉強する場合の心構えにも直ちにつながってくるわけです。

この伝統の問題は、きょうは詳しくお話ししなかったのですが、先ほど簡単に触れた神道とか仏教とかいうものの性質、それを私共日本人がどんなふうに取り入れてきたか、そして自分では自覚しなくても、心の中に痕跡として残っているのですから、やはりそれを明確に自覚

して、その欠点とか、その長所とか、そういう問題を両方吟味しながら、内村鑑三の残した問題を、私達がこれから追究していくという形をとる必要があると思うのです。

それと同時に、今までの明治以後の日本の文学史を全面的に書き直す必要があると思います。これは私は不勉強なので、明治以後の日本の文学史を書くだけの力はないのですけれども、私でしたら内村鑑三と森鷗外、それから正宗白鳥の、この三つの精神が演じた三つのドラマというものを中心として、そこから白樺の精神、それか

ら当然社会主義思想や共産主義思想にもつながっていきませんが、そういう形での文学史です。

つまり文学なら文学だけと小さく限定して取り扱わず、同じ時代の偉大な宗教家とか、偉大な社会思想家とか、そういう人の精神的な共通点、あるいは対決点というものを見極めながら、文学の歴史というものが語られなければならぬと思うのです。

ですから、日本で文学全集が出ましても、宗教論とか歴史論とか人物論を全部オミットしてしまっています。はいつているのは、小説とか劇とか詩だけです。

ところが外国の文学全集を見ると、その時の非常に優れた歴史の本も入っています。むろん立派な宗教の本も入れている。これはみなその国の言葉を、一番美しい言葉として残すために、文学というものの範囲を非常に広めて、そういう形で文学の歴史を勉強しているわけです。

われわれだけが明治以後、文学史というものを非常に狭いものにしてしまったわけです。もう少し、私は広い意味で精神の諸体系との関連における精神史というものを考える必要があると思うし、また皆さんもいろいろ文学を勉強される場合でも、その他美術を勉強される場合

でも、自分の分野を深めるといふことは、これはむろん大事なのですけれども、それと同時に視野をもう少し広くすることが必要ではなからうかと思えます。

そういう意味で明治の文学史をわれわれが勉強する場合に、きょうは内村鑑三の話しかしませんが、合は、植村正久とか新島襄とかいろいろ優れた人がいます。また岡倉天心のような東洋美術に詳しい人もいますし、まだ隠れたところにいろいろな思想家がいるわけです。そこへまた伝統的な面が影を落しています。

これは最近、たとえば中村真一郎などが文芸時評でい

っているのですが、たとえば谷崎潤一郎の文学とか川端康成の文学をわれわれが批評するとき、明治以前とは完全に切断されたものとして批評している。たとえば源氏物語が谷崎潤一郎のどこに、どういう形で受け継がれているのか、あるいは受け継がれていないのか。あるいは川端康成の文章が、たとえば枕草子なら枕草子に見られる感覚と似ているのか、似ていないのか、そういう伝統上の比較というものがほとんどなされていない、切断されている。これも一つの欠点だろうと思うのです。

いろいろと私は自分の不勉強を棚に上げて欠点ばかり



いつているのはなんですけれども、文学を勉強なさる場にただいまお話ししましたようなことを考慮に入れる必要がありはしないだろうか、そう思うのです。



日本文学電子図書館

---

## 日本人の文学

著 者：亀井勝一郎

制作者：宮澤一郎

底 本：「日本人の美と信仰」  
大和書房

1968年6月10日 初版発行



日本文学電子図書館